

フマニタス研究 (studia humanitatis) と近代世界の東西

根 占 献 一

The studia humanitatis and the Modern World between the West and the East

Kenichi NEJIME

私立大学戦略的研究基盤形成事業に基づく「新しい人文学の地平を求めて—ヨーロッパの学知と東アジアの人文学」(2014年12月6日 早稲田大学小野梓記念講堂)にて、コメンテーターの役割を求められている根占献一です。今、貴重な映像とともに自らの学術調査に基づき、コメントをされた早稲田大学教授河野貴美子先生に次いで、この任に当たることができることをたいへん幸いに思います。意見、感想を述べる前に、私の今の気持ちを分かっていたくために、若いころに立ちかえってみます。またその事は今回の企画と関わっていますので、ご理解ください。

私自身は、イタリア・ルネサンスの歴史と思想を専門にしています。ご多分にもれず、多くの「洋学」研究者はおそらく、明治以後の日本がヨーロッパ近代に直結し、日本の近世は無視して一向に構わないという「観念」の下に、研究を進めてきたのではないかと、思います。遅れた封建社会の江戸を研究してどうなるのだ、進んだヨーロッパの歴史、思想、文化を学ばなくては、自己の確立は出来ないとまで考えていたのではないのでしょうか。そのなかでヨーロッパの言語を学ぶのは理の当然だと考えていました。学部生の頃、第二外国語—序列をつけていますから、今は嫌な言い回しです—は第一外国語の継続学習とともに次のステップに進むための不可欠な手順と信じました。

歴史に普遍史、世界史という言い方があります。レオポルト・フォン・ランケは世界史を目指したと

習いました。しかしランケが叙述したのはヨーロッパであり、ドイツの歴史でありました。故国の歴史から離れたわけではありません。ヨハン・ホイジンガはランケ的歴史概念を超えて普遍的思考に近づこうとする文化史家に思われますが、主著『中世の秋』はいわば故郷の歴史です。ヨーロッパを知らずしてどうして今の日本を知ることができようかという気負いから、生まれ育った地域を離れての歴史、人文の研究はありえないのではなかろうか、と考えるに至りました。石母田正『中世的世界の形成』(昭和21年)のような著述は、私たち日本のヨーロッパ研究者がいかにも優れていても、ヨーロッパの歴史描写で物することが出来ない力業でしょう。歴史の研究はできるが、叙述になりうるかどうかの問題です。

他方で、西田直二郎『日本文化史序説』(昭和7年)を手にした時、驚きました。ヨーロッパ研究が咀嚼されて、この著はできあがっているのではないかと。日本列島に住む者は昔から外国文化を学んできたのであって明治以降に急に始まったわけではありませんが、それでも近代に大変貌を遂げ、飛ぶ鳥を落とす勢いの欧米に西田は学びつつ、自らの真の関心と拠って立つところを失うことはなかったように思われました。このような先人たちの古典的著書を知り、私の学究的態度はできあがっていった気がします。このため、今回、私立大学戦略的研究基盤形成事業で甚野尚志先生から書類の段階で参加を求められたのは、栄誉を伴う大きな関心事であり、またこうしてお三方の先生のご研究発表を拝聴でき

たのはたいへんな喜びとなりました。

さて、シンポジムのタイトルに見られる人文学のイタリア・ルネサンス的表現は、「フマニタス研究」(studia humanitatis) になります。古代ローマ共和政の危機的時代にキケロが使った用語でありましたが、長い中世には見られずに、ようやく14世紀後半から、コルッチョ・サルターティ(1406年死去)やレオナルド・ブルーニ(1444年死去)が用いるようになりました。彼らは二人してフィレンツェ共和国の書記官長でした。この「フマニタス研究」の先駆者としてフランチェスコ・ペトラルカ(1374年死去)を捉え、心から敬意の念を抱いていました。ペトラルカは「フマニタス研究」の父、人文学の祖といえるでしょう。ルネサンスはこうして始まりました。

この「フマニタス研究」はやがて15世紀半ば頃から、その学術内容が明瞭になっていきます。その中身が文法・レトリック・歴史学・詩学・道徳哲学を指すのが、それです。安酸敏眞先生は「現在、あらためて《人文学》を問う」—基調講演に位置づけられると思いますので、コメントも長くなります—と題されてお話しされた中、人文学にはサイエンスが含まれない、と言われました。これは、若いトンマーズ・パレントウチェッリがフィレンツェのサン・マルコ修道院の蔵書を分類した基準からも、正しいことです。彼は後に教皇ニコラウス五世(在位1447-1455)となるわけですが、ローマでのルネサンス文化活動はこの教皇着任から始まると評されるほど、重要な文化人でした。

こうして商人の町フィレンツェとともに聖職者の町ローマがルネサンスの中心になりますが、「フマニタス研究」なる概念は、宮廷文化が花咲く北イタリアの諸都市の学校でも盛んに用いられるようになり、またアルプスを越えてドイツの大学での講義告知にも、この用語が見られるようになっていきます。「フマニタス研究」は自然科学を含むリベラル・アーツと違う学科内容であること、つまり文法(言語学習)、レトリック(言語表現とともに口頭弁論)と詩学(韻文)、歴史学(散文)、哲学では倫理学(道徳哲学)が重視されていることにこの研究の特徴が見出されます。

安酸先生が人文学(studia humanitatis, humanities)と人文科学の区別を指摘されるとともに、フマニタスを learning (doctrina) と強調されているこ

とは興味深いところです。フマニタスはギリシア語のパイディアのラテン語訳であり、フマニタスに他の意味があるにしても、概念の核にはこの学識、教養の意味があることを忘れてはいけません。思いやりとか憐れみといった人間感情の意味合いにのみこれを取ると、本来の人間性の理解に至らないという、皮肉な結果になります。

人文科学の科学が英米圏のサイエンスという意味に引きつけられた言葉であれば、確かに問題があるでしょうし、日本でもこの意味であることは確かです。大陸側のヨーロッパでは、科学とはドイツ語でいう Wissenschaft、学問という広い意味で捉えることができたのですが、いつの間にか、アングロ・アメリカンの影響の大きさもあって、サイエンスは自然科学の分野を指すだけになったのではないのでしょうか。そして人文研究にもこのサイエンス性が必要となったようです。

ルネサンス学を専攻する者として「科学」をその方法論から理解したいと思います。これは、ここでは詳しく述べることはできませんが、「スコラ学」理解でも私はこれを方法論の問題と考えているのと同様です。「フマニタス研究」は中世のスコラ学の方法論とも、また同じくルネサンスに生まれた科学的方法論とも異なるもので、極めてユニークです。

安酸先生はキリスト教学(Christian Studies)、宗教哲学の専門家でいらっしゃいます。トレルチ研究者で知られていますが、レッシング研究でも業績を挙げられました。先のフマニタスがドイツ語圏に入ったときは「人間性」として、直訳的な Humanität からドイツ語として Menschheit、Menschlichkeit などと訳されていきますが、先生のレッシングの研究書にもこれらの言葉が見られます。人文の分野では訳語の問題がいつもあり、彼我の差がドイツ以上に大きいだけに考えさせられます。なお、先生には波多野精一とその愛弟子村岡典嗣との交友を扱った論文もあり、示唆を受けること多き高論です。

次いで、逸見龍生先生は「哲学者と人文主義者—フランス18世紀『百科全書』における〈ヒストリア〉の実践」と題されて研究発表をされました。逸見先生は私よりも非常に若い世代に属するヨーロッパ研究者で、特に標題に見られる百科全書の調査、百科全書派のディドロの研究ではフランスの学者と同歩調で討究を進めている実力者です。新進気鋭と

いうのは、まさに先生のような方を指すのでしよう。書かれている論文は常に緻密を尽くしています。

今日の発表では、アンリ四世の事績を語る財務総監シュリ『回想録』が問題になります。この『回想録』はアンリ四世の没後に刊行されて広く国内外で読まれ、アンリ四世の神話化に大きく寄与した歴史書のひとつであります。何度か異なる编者によって編纂されましたが、ディドロの使用したテキストはド・レクリューズ＝デ＝ロージュ神父編集による一七四七年版でした。そして『百科全書』第一巻刊行は1751年6月28日で、その関連の本文分析がなされます。

実にテキストを細心の注意で読み進み、先生は問いかけるのです。それは「フマニタス研究」の本質に遡及する文が見られるところです。同研究の下でフマニスタ、人文主義者が誕生しましたが、その箇所を引用してみましょう。——混迷した現在時を深く問い直すために過去の言葉への遡行を促し、その言葉をみずから生き直したロレンツォ・ヴァッラ以来の人文主義者たちの政治的雄弁の系譜と、過去の国王の雄弁を引き写す18世紀の哲学者の営為はここで確かに連続している。・・アンリ四世の（この）言葉を史料から辞書項目に書き写しながら、かつてフィレンツェに、近代ではイングランドに確かに存在していた言論におけるこの市民的自由を蘇生することこそは、『百科全書』という辞書が担うべき政治的な使命であると、このときディドロは思っていなかったか、と。

では、来たるべき「公論」へと、ディドロら「文人たちの結社」(une société de gens de lettrs)が託した夢は実現したのでしょうか。レオナルド・ブルーニとディドロら、ルネサンスと啓蒙思想の繋がりがここに見られますが、このような人文学が再度、現代の中で甦ることはあるのだろうか、こちら先生のお考えを伺いたくなりました。それが今回のシンポジウムの目指す問題でもあります。

最後に研究発表されたのは武藤秀太郎先生で、その題目は「日中両国における人文学の概念形成」でありました。これは、このたびのシンポジウムにおいて東アジアの視点を織り込んだ、具体的内容に富む講演となりました。先生は、日本を含む東アジアの、そして時代的には19・20世紀と新しいところの専門研究者であり、この点で先のお二人、安酸先生と逸見先生と違っていません。また、逸見先生より

さらに若いながら、ご著書『近代日本の社会科学と東アジア』では福田徳三らを詳しく扱い、安酸先生とは異なるタイプの日本からの留学経験者を扱っています。この著書を読んでいると、東アジアの状況が今日とあまり違っていなかったのではないかと、やはり日本にとっては同じくChinaの存在が大きく、学問上では無論のこと、政治的にもそうだろうというふうに思われます。日本はアジアから離れ、抜け出すことはできません。

今回は、二概念「整理国故」と「封建」に注目し、人文学の日中間の学問上の関連と相違を、特に胡適を中心に扱っています。特に封建概念については、朝河貫一の影響を問題にしている、大いに注目されます。武藤先生は社会科学の分野に入る研究者でしょうが、ご著書も、ご論文も、また今回の発表も、なにか精神史の手法で問題を明らかにされますので、人文学に関わる研究に思えます。残念ながら、今日のご発表では時間の関係があり、朝河の話が聞けませんでした。世に社会学者、経済学者、教育学者として知られている人物を扱っていても、その内容は本質的に歴史に関わり、示唆を受けるところ大です。

コメント冒頭で、「洋学」研究の限界性を少し強調し過ぎたかもしれませんが、朝河はアメリカに骨を埋めてヨーロッパにおける中世史研究に小さからぬ貢献を果たしました。中世史研究というと、ヨーロッパの歴史学に通暁した原勝郎は、その『日本中世史』(明治39年)で武家の時代を積極的に評価して、中世暗黒史観を乗り越えたと位置づけられています。これはペトラルカの中世＝暗黒観を想起させますが、ヨーロッパでは時代観としては武人でなく文人の文化、人文学が問題でした。ペトラルカ自身はまだ人文の華咲くルネサンスに活動していたという思いでなく、暗黒(tenebrae)の時代、中世に生きていると感じていました。サルターティやブルーニの世代が旧時代、以前の時代のこの暗黒説を当然視するようになります。彼らはこの暗黒から光の世界に進んだと考え始めていました。

ヨーロッパでは近世は明るくなり、さらに啓蒙思想家が中世を真っ暗闇にして行きます。日本史の近世概念の確立に貢献したのは、日本経済史の草分け、内田銀蔵でした。彼もまた留学を体験して、ヨーロッパの近代を告げるルネサンスと宗教改革の時代的役割に通じていました。こうして近世概念(『日

本近世史』明治 36 年) は生まれました。日本の場合、原や内田のおかげでどの時代も至当に評価され、ヨーロッパの時代の三区分法とは異なっています。コメントで挙げた「洋学」研究者は外国の歴史のみならず、国内の歴史に通暁していて、今なお私たちの人文の問題では鏡となり得る研究者です。したがって、19 世紀から 20 世紀前半にかけて活躍した彼らと人文学との関係を再考することから、21 世紀における人文学研究の意義を検討することは当然可能でしょう。

以上でコメントを終わります。